

金沢美大における外国語教育の現状・成果報告

およびこれからへの展望

——フランス語教育を中心として——

青 柳 り さ

1. はじめに

大学における外国語教育が、読むこと一辺倒から、さまざまな議論を経ながらも、読む・聞く・書く・話すという総合力をつけることを目標とするようになって久しい。芸術系の大学においても同様である。ほとんどの学生が海外へ出る機会をもつ今日においては、専門書の読解だけではない実践的な力を養う教育が必要となっている。教育法も常に変化し進歩している。本学は芸術を専門とする大学であり、語学教育が中心に据えられているわけではない。しかし現実に外国語の必要性は増す一方である。このような状況のもとで、限られた時間をいかに有効に活用してゆくかは、カリキュラムを組み立て、教育を実践してゆく私たちにとって重要な課題である。

フランス語初級 (4)
フランス語初級 (4)
フランス語中級 (4)
フランス語中級 (4)
フランス語上級 (4)
フランス語上級 (4)

(美学・美術史演習原典研究 (4) をもって当てることができる)

ドイツ語初級 (4)
ドイツ語初級 (4)
ドイツ語中級 (4)
ドイツ語中級 (4)
ドイツ語上級 (4)
ドイツ語上級 (4)

2. 四芸大における外国語教育の現状

金沢美大のこれからのよりよい外国語教育のあり方を考えてゆくために、まず、美大を含めた芸術系の大学の現状を、各大学のカリキュラム等を参考に把握しておきたいと思う。(ここには専門の外国語科目も含めることとする。括弧内は単位数。)

イタリア語初級 (4)
イタリア語初級 (4)
イタリア語中級 (4)
イタリア語中級 (4)
イタリア語上級 (4)
イタリア語上級 (4)

東京芸術大学

英語初級 (4)
英語初級 (4)
英語中級 (4)
英語中級 (4)
英語上級 (4)
英語上級 (4)

オランダ語 (4)

スペイン語 (4)

芸術学科が外国語 3 2 単位を必修としている以外は、すべて、選択科目となっている。

ほかに東京芸術大学言語・音声トレーニングセンターがあり、英・仏・独・伊について「会話 1」(4)、

「会話2」(4)、「作文1」(4)、「作文2」(4)が開講されており、それぞれの語学の中級、上級として認定されることになっている。

独・仏・伊の初級については週2回の授業をともに履修することが望ましい、という但し書きがある。

京都市立芸術大学

英語1A(2)、英語1B(2)
英語2A(2)、英語2B(2)
英語3A(2)、英語3B(2)
英語4A(2)、英語4B(2)
英語5A(2)、英語5B(2)
英語6A(2)、英語6B(2)

フランス語1-1(4)
フランス語1-2(4)
フランス語2-A(2)、フランス語2-B(2)

ドイツ語1(4)
ドイツ語2A(2)、ドイツ語2B(2)

すべての学科において8単位選択必修。
フランス語1-1、フランス語1-2、ドイツ語1(外国語初級)は重複して履修できない。

愛知県立芸術大学

英語初級(4)
英語上級(4)

フランス語初級(4)
フランス語上級(4)

ドイツ語初級(4)
ドイツ語上級(4)

イタリア語初級(4)
イタリア語上級(4)

1 カ国語 8 単位選択必修

金沢美術工芸大学

英語会話1(4)
英語会話2(4)
英語会話3(2)
英語会話4(2)
専門語学演習1(2)
専門語学演習2(2)

フランス語基礎(4)
フランス語会話1(4)
フランス語会話2(2)
フランス語会話3(2)
専門語学演習1(2)
専門語学演習2(2)

ドイツ語基礎(4)
専門語学演習1(2)
専門語学演習2(2)

イタリア語基礎(4)
専門語学演習1(2)
専門語学演習2(2)

西洋古典語(ギリシャ語、ラテン語) 専門語学演習
1(2)
西洋古典語(ギリシャ語、ラテン語) 専門語学演習
2(2)

古文専門語学演習1(2)
古文専門語学演習2(2)

漢文専門語学演習1(2)
漢文専門語学演習2(2)

1年次で4単位(芸術学専攻は8単位)以上、2年次

で4単位（芸術学専攻は8単位）以上履修しなければならない。

芸術学は、専門語学演習16単位以上必修。

産業美術学科では、英語会話3、4必修。

これまでは、大部分の一般大学の教養課程が、第1外国語、第2外国語（英・独・仏が中心）を2年間で32単位、選択必修としていた。

文部省の大学設置基準改定後は、これを24単位とする（1年次16単位、2年次8単位）、あるいはすべてを選択科目とってしまう大学も増える一方、中・上級クラスの選択の幅を増やす、あるいは初級における会話等実践面を充実させるなどの工夫がなされている。東大教養部のように改革の特色に外国語科目の充実を挙げる大学もあらわれている。

これを四芸大に比較してみると、選択の幅に関しては、東京芸大（英独仏伊蘭西）、金沢美大（英独仏伊羅ギ）、愛知県芸（英独仏伊）と、むしろ、文系学部をもつ一般大学より充実しているともいえる。上級クラスの設置についても、芸術学科を設置している、東京芸大と金沢美大は、時代に先行してきたともいえるだろう。また実践面での外国語についての東京芸術大学言語・音声トレーニングセンターの設置は注目に値する。金沢美大においても数年来英語会話、フランス語会話の充実に取り組んできた。京都芸大の履修案内にもこのような動きを読みとることができる。外国語を専門とする大学ではないが、芸術という領域は一般の大学よりもさらに世界に開かれており、そこには外国語を必要とする土壌がある。その必要性に的確に対応してきた結果であり成果であると考えられる。

ただし東京芸大を除き、まず時間数を必要とする初級の外国語を、1年目に週1回しか履修できないのは、教育的配慮から考えると望ましいとはいえないだろう。

3. 金沢美大における外国語教育の現状(フランス語教育を一例として)

フランス語は、選択必修科目となっており（芸術学は1993年度より必修科目）、選択はほぼ学生の自由にまかされている。ある程度モチベーションのある学生が入ってくるということ、自分で選択したという意識が働くということで、必修とするよりも効果があがるようである。欠点は、初級の語学は覚えることが多く積み重ねを必要とするため、卒業に必要な単位でない場合、試験が近づくとあきらめてしまう学生がかなりあらわれてくることである。また先ほども述べたとおり、東京芸大を除く三芸大は、1、2年次、週1コマを履修することになっているが、これは時間数がものをいう初級の外国語学習においてはどうみても不十分である。忘れたころに次の授業がやってくるという現在の状況は、非常に無駄が多い。1年次に、希望する学生が週2コマ以上履修できるか、あるいはそれにかわるシステムの可能性をを考えてる必要があるだろう。

フランス語基礎

初級フランス語の文法クラス。フランス語の基本的な表現を習得し、文法のしくみを把握することを目的とする。

従来は「フランス語1」としていたが、より内容に即した名称に改めた。

1991年度

テキスト 『初めてのフランス語』 高岡厚子他著 白水社（文法読本）

副教材 *Chansons et contines* カセット

テレビ『NHK フランス語講座』'91

受講者 27名

芸術学（9） 日本画（1） 油絵（6） 彫刻（2）

工業デザイン（6） 商業デザイン（3）

1992年度

テキスト 『ことばのしくみ フランス語の場合』

曾我祐典著（文法試験教材）

副教材 テレビ『NHKフランス語講座』'92

受講者 31名
芸術学(9) 日本画(1) 油絵(10) 彫刻
(4) 工業デザイン(2) 商業デザイン(1)
工芸デザイン(4)

1993年度

テキスト 『ことばのしくみ フランス語』曾我祐典著 白水社(文法)
副教材 ビデオ『ボンジュール・パリ』中山眞彦編 白水社

受講者 45名
芸術学(10) 日本画(2) 油絵(9) 彫刻
(5) 工業デザイン(8) 商業デザイン(3)
工芸デザイン(8)

1994年度

テキスト 『ことばのしくみ フランス語』曾我祐典著 白水社(文法)
副教材 テレビ『NHKフランス語講座』'94
ビデオ『フランス語の発音』早美出版社

受講者 55名
芸術学(10) 日本画(7) 油絵(11) 彫刻
(1) 工業デザイン(12) 商業デザイン(7)
工芸デザイン(7)

基本的な文法を一通りマスターすることで、今後、フランス語が必要となったときの基盤となればよいと考えている。またことばを通して、文化の理解を深めることも、目標のひとつである。

1年目(1991年度)は、比較的易しい文法読本をテキストに採用したが、文法をしっかりと学びたいという学生の希望により、次年度より、文法中心のものに変更した。

受講者数は確実に増加しているが、反面、レベルにもばらつきがあらわれ、細やかな指導が難しくなった、試験をさかいに、自由選択の学生が半減する、芸術学の学生とそれ以外の学生たちとの到達目標のずれが顕在化する等、問題点もあらわれている。

選択方法、あるいはクラス分けの工夫が必要となってきた。

フランス語会話1

初級フランス語の「会話」クラス。主として基本的な口語表現の能力を養成することをめざす。フランス語基礎の単位を取得した学生を対象とする。従来の「フランス語2」。

1991年度

テキスト 『フランス語 '90』曾我祐典・中川努他著 白水社
副教材 『フランス語200文』中川努他編
受講者数 27名
芸術学(8) 日本画(7) 油絵(6) 彫刻(4)
工業デザイン(1) 商業デザイン(1)

1992年度

テキスト 『フランス語 '90』曾我祐典・中川努他著 白水社
副教材 『フランス語200文』中川努他編
受講者数 25名
芸術学(8) 日本画(1) 油絵(8) 彫刻(2)
商業デザイン(2) 工芸デザイン(4)

1993年度

テキスト 『フランス語 21』曾我祐典・中川努他著 白水社
副教材 ビデオ『ボンジュール・パリ』中山眞彦編 白水社
受講者数 23名
芸術学(10) 油絵(9) 彫刻(2) 商業デザイン(1) 工芸デザイン(1)

1994年度

テキスト 『モザイク』大阪日仏センター編
副教材 フランス語200文 中川努他編
受講者数 20名

芸術学（10） 油絵（5） 工芸デザイン（5）

簡単な会話表現を身につけフランス語に親しむことが目標。1年次を終えた段階で人数がかなりしばられているため、休むと追いつくのに苦労するようである。課題の締め切り、研修旅行、集中講義後、履修を放棄する学生が必ずあらわれるのは残念である。毎年のことなので、これらの学生へのケアを現在考慮中である。

2年生の段階で、仏検に挑戦する学生や、毎年八王子で開催されるスタージュ（語学研修）に参加する学生、海外へ留学する学生、給費留学試験をめざす学生もあらわれてくるので、基本的な（すぐにそのまま使うことができる）2000文を暗記してもらっている。

フランス語会話2、3

これまでに学習した文法や基本単語を使って、日常会話をマスターすることを目標とする。

1991年度

ビデオ教材 *Avec Plaisir* Hachette

1992年度

ビデオ教材 *Avec Plaisir* Hachette

1993年度

ビデオ教材 *Bienvenu en France* Didier・Hatier

1994年度

ビデオ教材 *Bienvenue en France* Didier・Hatier

外国人講師による会話の実践的レッスン。受講者数も当初の2～3人から15人程度に増加してきており、学生の会話への興味は高まっているが、もう少し力をつけてからこの授業にのぞめるようにできればよいと思っている。

また人数の関係上、2と3を合併クラスにしているが、レベル的にかなり無理もある。さらに人数が増えれば、2と3を分けたいと思っている。しかし一方では、4年（あるいは留学から戻ってきた）先輩と同じクラスで学ぶことによって、3年生によい意味での刺激を与えているという利点もある。

専門語学演習1、2（全学対象）

主として聞く力、書く力の向上をめざす。

昨年度までは「フランス語（講読）」のクラスであったが本年より名称変更。これにともない、読む力よりも実践面に主眼をおいた。

1991年度

20世紀のベスト・セラー作品を読む。ル・クレジオ『ダヴィド』

受講者数 8名

芸術学（7） 工芸デザイン（1）

1992年度

ル・クレジオ『ロンド』

受講者数 8名

芸術学（6） 日本画（2）

1993年度

パスカル・レネ『刺繍する女』

受講者数 9名

芸術学（3） 日本画（3） 油絵（2） 彫刻（1）

1994年度

『新初等フランス語一文法編一』京都大学フランス語教室編 白水社

『フランスの四季』滑川・前川著 第三書房（ディクテ）

シャンソンを用いたエクササイズ

受講者数 16名

芸術学（12） 日本画（1） 油絵（1） 商業デザイン（1） 工芸デザイン（1）

本来「フランス語（講読）」という名称であったため、できるだけ学生に親しみやすい作品（フランスの現代文学のベストセラー作品）を選んで講読の形式ですすめてきたが、共通造形センター科目となり、専門語学演習と名称を変更するにあたって、各専攻の学生からの要望も考慮し使えるフランス語、留学に対応できるフランス語を目標に授業内容を変更。

読むことを、芸術学の専門語学演習に集中させ、話すことは、会話1、2、3の領域と考え、聞く、書く能力の向上に主眼をおいた。

文法の体系的復習に加え、ディクテでは1年生の講読レベルのフランス語を家で聞いてきてもらいそれを板書してもらったものを学生といっしょに添削してゆくという形式をとっている。聞く力はもちろん、単調な作業になりやすい仏作文のレッスンに、緊張感と遊びの感覚をもって取り組むことができるのではないかと期待している。文法復習、単語の音と綴りの関係、イントネーションによる、文節、文の区別等もはっきりしてくる。またシャンソンを用いたエクササイズは、本紀要に掲載したものを中心にビデオなども取り入れて採用した。

以前は講読を選択する学生と会話を選択する学生がはっきりと分かれていたが、文法復習を含め会話と講読の両方の要素を盛り込んでいるため、会話と並行あるいは講読と並行して受講している学生がほとんどである。

専門語学演習1、2（芸術学対象）

主として専門の文献を読解する能力の向上めざす。テキストの選択にあたっては、美術以外の芸術領域から選ぶよう心がけている。

1991年

19世紀のフランス文学から、ボードレールの散文詩。担当者は解説をする。

受講者数 7名

1992年

19世紀のフランス文学からボードレールの4つの韻文詩とその解説文。とりあげた詩はすべて暗唱。

受講者数 6名

1993年

フロベールの短編から『純な心』。

受講者数 8名（日本画1名を含む）

1994年

スタンダールの『赤と黒』

受講者数9名（日本画1名を含む）

定評のあるフランス語で書かれたすぐれた文学作品を原文で読む（文章・文体を味わうことも含めて）ことによって、専門書読解の能力をつける。また同時に一流の文学、芸術への目を養うことができればと考えている。今後テキストを美術の領域から選ぶかどうか懸案中。ただし、卒業論文等に必要な資料、領域となると各自異なるので、片寄ってしまうおそれもある。現在はこのような文献に関してはむしろ個人指導の形をとっているが、教員の側の負担は大きい。

（読解には直接関係しないが、最初の20分、その週に放映されたフランス2のニュースから、美術・教育・社会問題等、身近な話題を選び紹介している。語学的な面（ディクテ）からまずアプローチし、内容を理解したうえで文化的な面（現代のヨーロッパ情勢のタイムリーな紹介、ニュースのコメントや切り口等）について皆で意見を述べあっている。このクラスには留学経験者が常に1～2名いるので、かなり効果的にニュースを使用することができる。）

金沢美大に赴任して4年目になる。東京芸大のようなトレーニングセンターの設置等は大学の規模を考えるとおそらく不可能であろうが、前任者から引き継いだこれまでの枠組みのなかで、学生が、読む・聞く・書く・話すという総合的なフランス語の能力を身につけることができるよう努力してきた。読む

ことに関しては「フランス語基礎」「専門語学演習」、聞くことに関しては「フランス語会話」「専門語学演習」書くことに関しては「フランス語基礎」「専門語学演習」、話すことに関しては「フランス語基礎」「フランス語会話」と、役割をより明確にし、年度ごとの反省を加えてそれぞれの内容を少しずつ変更、改善してきたつもりである。

自分の専門とバランスをとりながら、学生もそれなりに努力しているように見受けられるが、やはり語学にける絶対時間が、時間割の上でも、個人の努力の上でも足りないのが現状である。

4. 芸術系の大学における外国語教育の可能性とこれからへの展望

1年で初めて英語以外の外国語としてフランス語を学ぶ学生たちは、男性名詞、女性名詞、動詞の活用、発音等、これまでに経験しないものへの（ある意味では新鮮なともいえるかもしれないが）驚きと戸惑いを感じ、また難しいという印象をもつわけだが、2年次以降にドイツ語やイタリア語を学ぶにあたっては、逆に言語間の共通点に気づき、興味をもち、むしろこれらの言語を易しく感じるようである。

現在2年次でドイツ語基礎を履修する学生が30～40名、イタリア語基礎を履修する学生が20名以上、両方履修している学生も何人もいる。専門語学でギリシャ語・ラテン語を履修する学生も現在6名いる。1年でフランス語基礎を学んだ学生のほとんどが、全くの自由選択科目であるにかかわらず、さらに新しい言語に挑戦している。学生たちの外国語にたいする学習意欲は、現在の国際情勢を考えればある意味で当然かもしれないが、彼らの学ぶ意欲は大い評価できる。開かれた選択肢をそれぞれが自分なりに生かしているのだろう。

本年は、卒業論文の関係上、スペイン語を必要とする学生がいるが、学内では対応できない。開講するかどうかは別として、開講できる可能性を潜在能力として大学がもつことができればよいと思う。オランダ語、中国語、ハングル語等についても同様で

ある。大都市圏のように町中に各種語学学校があふれているわけではないだけに、大学内に、ある程度柔軟に対応できる可能性をもつことは、一見、贅沢だが地方の大学として必要なことかもしれない。

カリキュラムのなかでの時間数が限られているため、外国語習得に必要な時間を授業時間として確保することは非常に難しい。従って、学生の自発的な学習が大きな鍵となる。学生の自発的な学習意欲を喚起することを一つの目標に、フランス語教育の一貫として、授業時間外にフランス映画会を毎週開催している。当初3～4名でスタートし、今年で4年目になる。週休2日制の導入にともない、土曜の午後から金曜の6時に開始時間を変更、本年秋よりのプロジェクターの導入もあって、現在では1回の上映の動員数30～40名になった。日頃上映されることの少ないフランス映画への興味から、フランス語を選択していない学生もかなりやってくるようである。さらにことばへの興味へと結びついてくれればと思っている。

しかしながら映画のビデオ準備から上映まで、あるいは視聴覚教材の購入から貸し出しまで、すべて教員個人によってなされているのが現状である。費用面でも、教員研究費のかかなりの部分がこれらの準教材費に当てられており、教員の時間的負担も大きい。できることも限られている。大学としての、視聴覚教材の購入、それを利用できる視聴覚施設（視聴覚教室、映写室等）の設備、及び人員の充実を希望している。

現在、図書館のカセットテープは貸し出し不可。ビデオは図書館内の隅に一所ビデオデッキとモニターが設置されていてそこで視聴することのみ認められている状態だが、これは落ちついて見ることができ環境とはいいがたい。ソフト面、ハード面ともに利用できる体制が必要である。外国語の習得に必要な時間をカリキュラムのなかに確保することが非常に難しい現状にあって、大学内で自発的に学習できる環境を整備し学生の意欲に応えることが、今、私たちにできることだと考える。

ことばは文化である。語学教育という範疇にはお

さまりきれない。学生たちが、外国語を学ぶことから、さらにその視野と可能性を広げてゆくことができるよう今後とも努力したいと思う。

※ 参考資料

東京芸術大学美術学部平成6年度履修案内
京都市立芸術大学美術学部1994年度履修要項
愛知県立芸術大学平成5年度学生便覧
金沢美術工芸大学平成6年度学生便覧および授業科目案内

各大学学生課、及び本学学生課杉元氏のご協力に感謝します。